やしろ田のむかし話

〔上福田編〕

いちえもんさんのおかゆ

木梨地区

むかしむかし、木梨という村にみんなから、いっちょもんさんと呼ばれている、大熊市右衛門という人が住んでいました。いっちょもんさんの家はとても大きな家で、灰倉、※ほしか倉、綿倉、みそ倉、米倉、西倉、奥倉などたくさんの倉がずらっと並んでいました。お屋敷にはたくさんの※おとこしや※おなごしが働いていました。

毎年秋になって、お米がとれるころになると、村の人たちはいっちょもんさんのお屋敷へ、年貢を納めにやって来るのでした。家で取れたお米をわらであんだ俵に入れて、荷車に積んで引いて来るのです。

「おい百太郎いくぞ。」

おじいさんに声をかけられて百太郎は、

※ほしか―脂を絞ったイワシ、ニシンを乾燥させた肥料。
※おとこし―下男　雑用をするために雇われている男。
※おなごし―下女　雑用に使われている召使いの女。

「あいよ。」

と、元気よく返事をして荷車の後押しをします。

「よいしょよいしょ　よいしょよいしょ。」

米俵を積んだ車はとても重いので、でこぼこの山道になってくると、なかなか前へ進みません。おじいさんも百太郎も汗だくです。

「よいしょよいしょ　よっこらしょ、よいしょよいしょ　うんとこしょ。」

その様子を山のいたちの兵吉が見ていました。

「重たそうだな。手伝ってあげよう。」

と、ちょこちょこちょこ　と出て来て、百太郎の後を押してくれました。

「やあ兵吉、おおきに。」

「よいしょよいしょ　よっこらしょ、よいしょよ

いしょ　うんとこしょ。」
その声をたぬきの豆吉が聞きつけて、
「重たそうだな。手伝ってあげよう。」
と、とことことこ　と出て来て、いたちの兵吉の後ろを押してくれました。
「やあ、豆吉も押してくれるのか。助かるよ。」
「よいしょよいしょ　よっこらしょ、よいしょよいしょ　うんとこしょ。よいしょよいしょ　よっこらしょ、よいしょよいしょ　うんとこしょ。」
みんなで押して行きました。いっちょもんさんのお屋敷の近くまで来ると、
「ああやれやれ、おかげで助かったよ。兵吉に豆吉すまなんだなぁ、おおきに。」
と、おじいさんがお礼を言いました。百太郎も、
「兵吉　豆吉、おおきに。」
と、お礼を言いました。
　いっちょもんさんは、※帳場で勘定づけをしながら、年貢を納めに来る人に、
「ごくろうさん、ごくろうさん。」
と、ねぎらいの言葉をかけていました。おじいさんと百太郎が入っていくと、
「やぁ　ごくろはん。おまはんとこは、今年はようでけたなあ。」
「へえ、おかげさんで。」
「去年はどないやったかいなあ。そうやそうや、去年は不作でえらいこっちゃったんやなあ。そんなら今年は、一俵家へ持って帰れ。」
「ええ、ほんまでっか、助かります。おおきに。」
「おっ百太郎もきとったんか。ごくろはんやったな。ちょっとこっちにおいで。」
いっちょもんさんはそう言うと、おじいさんの後ろにかくれるようにしていた百太郎に、おいしそうなおまんじゅうをくださいました。
「おおきに。」
百太郎はとびあがるほどうれしくて、ぶるぶるかいていた汗が、すっと引いていくように思いました。

※帳場―商店、旅館、料理屋などで、帳付けや勘定をする所。

「うまそうやなぁ。おいら一人で食べたらもったいない。兵吉や豆吉にも分けたろう。」
と、帰りの山道でおじいさん、豆吉、兵吉、百太郎の四人でおまんじゅうを分け合って食べました。
「うふふ、うまいなあ。」
「うん、おいしいなあ。」
「こんなうまいもん食べたんはじめてや。」
みんなは顔を見合わせて、にっこりしました。
そんなある年のことです。雨がひとつも降らずお天気ばかりで、田んぼの稲や野菜が枯れてしまい、お米が一粒も取れず、ききんに陥りました。
「あーんあーん、お腹がすいたよう、何か食べたいよう。」
と、泣いても何も食べることができないのです。百太郎の家でも食べるものが何にも無くなり困っていました。山のいたちの兵吉やたぬきの豆吉も、
「お腹がすいたよう。」
「何か食べたいよう。」
と、うろうろしていました。草の葉っぱや木の根っこをかじったりしました。お腹がすきすぎて、倒れたり病気になったりする人がたくさんでました。
「困ったことになったぞ。何とかしてみんなを助ける方法はないもんやろか。」
と、木梨のいっちょもんさんは、いろいろ考えました。
「倉にあるのはわずかばかりの米とさつまいも。そうや、これで芋がゆを炊こう。」
いっちょもんさんは、さっそく倉から大きな大きなお釜を出させ、山から枯木や枯枝を集めてきて、たき木をたくさん作りました。庭に大きなお釜をすえつけて、たき木を燃やし、大きなお釜いっぱいに、芋がゆを炊きはじめました。
はじめちょろちょろ中ぱっぱ、ぱちぱちごぉーっと燃えてきて、ぐつぐつぐつぐつ煮えてきて、ぶくぶくぶく泡ふいて、その泡が吹きこぼれないよう大きなお釜のふたとって、じっくりじっくりたくのです。やがて、ほんぐほんぐ、ほんぐほんぐゆげ

が出て、ふんわかほわーんとお芋のいいにおいがあたり一面ただよいました。
「さあ、えんりょのう食べておくれ。」
お腹のすいている人たちにとって、どんなにありがたかったことでしょう。
「おい、木梨のいっちょもんさんとこへ行けば、芋がゆを食べさせてもらえるそうな。」
「えっ、ほんまかいな、ありがたいなあ。」
「わしも食べさせてもらいに行ってもええやろか。」
「うちも行ってよばれてこよう。」
「おいらも行ってこよう。」
と、おおぜいの人が次から次へとやってきました。
百太郎もおじいさんと一緒にやってきました。おいしそうなお芋のにおいをかぎつけて、いたちの兵吉とたぬきの豆吉もやってきました。
「いただきます。」
「ああ、なんてうまいんだろう。」
「うーん、うまい。」

芋がゆに舌つづみをうちながら百太郎は、
「ほんまにいっちょもんさんはえらい人やなあ。おいらも大きくなったら、いっちょもんさんみたいに弱い人や、困っている人を助ける親切で立派な人になろう。」
と、思うのでした。

木梨いっちょもんさんの　かゆたく音は
はじめちょろちょろ　中ぱっぱ
ぱちぱちごぉーっと　燃えてきて
ぐつぐつぐつぐつ　煮えてきて
ぶくぶくぶくぶく　泡ふいて
ほんぐほんぐ　ほんぐほんぐ　ゆげがでて
ふんわかほわーんと　いい匂い

こうして心の広いいっちょもんさんのおかげで、大勢の人たちが、苦しいききんを乗り越えることが出来たということです。今でも、

「木梨いっちょもんさんのかゆたく音は、一里聞こえて二里ひびく。木梨いっちょもんさんのかゆたく音は、一里聞こえて二里ひびく。」
と、言い伝えられています。

大熊家系譜

「先祖代々家主之分」として、横井太郎右衛門から伊兵衛嗣市右衛門まで六代について記している。これによると横井太郎右衛門は、丹波の国多紀郡八上（篠山町）の八上城（高城とも、山城）の城主□田小三郎の家来で、天徳元年□月に同国大熊村（篠山町、明治二十二年多紀郡城北村、昭和三十年四月二十日篠山町新設により編入）へ来住したが、八上城落城のため浪人したと記している。八上城は応仁の乱後、細川氏の被官波多野氏が永成五年（一五〇八年）頃築城したといわれる。天正十年（一五八二年）明智光秀により落城、前田玄以茂勝配下となっている。太郎右衛門以下累代にわたって郡内各地と婚姻関係を結び定着した。

子安地蔵

木梨地区

むかし　むかし、木梨という村に、それはそれは仲良しで働き者の夫婦が、幸せに暮らしていました。幸せなこの二人にも、一つだけ悩みがあったのです。それは子どもがいないことでした。

二人はいつも、

「欲な事は言わん。男の子でも女の子でもいいから、一人だけ子どもが欲しいものじゃのう。」

と話していました。

「どうか子どもをお授け下さいませ。」

毎朝、二人は一生懸命お祈りをしました。そして、東の方のお寺へお参りすると良い、と聞くと早速出かけ、西の方の神様がよく叶えて下さると聞くと、西の方へと出かけて行き、一心にお祈りをするのでした。

でも、いくらお祈りをしても、すこしも、赤ん坊の出来るきざしがありません。

「どうしても私達夫婦には、赤ん坊が恵まれへんのやろか。」

と、おときさんは、すっかりしずんでしまいました。

心のやさしいけんすけどんは、そんなおときさんを見るのがとってもつらかったのです。けんすけどんは、村中で一番物知りと言われる、おはつばあさんの所へ、相談に出かけました。

「あのーおはつばあさん、何でもおはつばあさんに聞いたらよう知っとってやいうことやさかい、ええ智恵かしてんか。」

「なんや　けんすけどん、うっとうしい顔してどないしたんや。」

「あのうなあ、わしら夫婦にはちっとも子どもが出来んのや。おときもこの頃すっかりしけこんでしもうてなあー。なんとかならんやろうか。」

「あのなあ、木梨の原坂に、昔からお地蔵様があったんや。何でもよう願いごときいてくれてやそうや。ひとつだまされた思ってお参りしてみいな。」

この話を聞いて、早速二人は原坂へ出かけて行きました。原坂は、草がぼうぼうと茂って、おはつばあさんに聞いてきたお地蔵様が見当たりません。けんすけどんとおときさんは、汗びっしょりになってかまで草を刈りました。

「あ！　おとき、これや、これやがな、おはつばあさんが教えてくれたったお地蔵様や。」

そう言いながら、周りをきれいにしてさしあげました。

「まあほんまや、えらい草にうずもれて。」

それからは、毎日毎日熱いお茶を持ってお参りしました。でも、やっぱり赤ん坊は生まれません。

「あんた、今度もあかんみたいや。お地蔵さんも言う事聞いてくれてないわ。」

「ほんまにどないしたら、ええねんやろう。」

と、二人はがっかりしていました。

ちょうどそこへ、村一番のお年寄りといわれるおこうさんが通りかかったのです。

「あんたら二人どないしたんや、そんなにうかん顔して。」

「あのなあ、わしら夫婦にどないしても子どもが出来んのんや、原坂のお地蔵様にも頼んだんやけど、あかんねん。」

「けんすけどん、おときさん、あのお地蔵様を赤ん坊と思って抱いて寝てみい。きっと、よう言う事聞いてくれてやそうな。」

と、教えて下さいました。このことを聞いた二人は、明くる朝暗いうちに原坂へ出かけ、大切に大切にお地蔵様を借りて帰ってきました。そして、その夜から、おときさんはまるで自分の子どものように、やさしく子守歌を歌ったり、お話を聞かせたりしながら、抱いて眠ったのです。けんすけどんは、

「どうか赤ん坊をおさずけ下さい。お願いします。」

と、一生懸命祈りつづけたのです。

何日位たったでしょうか。

「あんた、どうも赤ん坊が出来たみたい。」

「えっ、ほんまか、夢とちがうか。」

けんすけどんは自分のほっぺをつねってみました。

「いってえ！　ほんまやほんまや。お地蔵様のおかげじゃ、おかげじゃ。」

と言って、大喜びでお地蔵様を原坂へお返しし、毎日毎日、朝に晩にお参りをつづけたのでした。

おときさんのお腹は、一日一日と大きくなっていきました。けんすけどんは、おときさんのお腹を見てはうれしそうに、

「おとき、大事にしいや、ころんだらあかんで。」と、やさしくいたわるのでした。

やがて、玉のような元気な赤ん坊が生まれたのです。けんすけどんは、天にも昇らんばかりの喜びようでした。赤ん坊も、日に日にすくすく育っていきました。

「お地蔵様、ありがとうございました。」

「ありがとうございました。」

けんすけどんとおときさんは、あの人通りの少ない原坂ではお地蔵様が淋しかろうと話し合い、早速近くの石屋さんにお願いして、かわいいお地蔵様をもう一体作ってもらいました。おときさんは赤いよだれかけを作り、大切におまつりしました。

この話を聞いて、二体並んだ原坂のお地蔵様に、

遠くから子どもの欲しい夫婦がお参りに来て、お地蔵様を借りてかえり、次々と子宝に恵まれたということです。

村の人々は、このお地蔵様のことを、いつのころからか子安地蔵と呼ぶようになりました。

◉参考資料　加東郡誌

北播磨の伝説　吉田省三編著

やしろの昔ばなし　社町ふるさと研究会編

（注）子どもに語りきかせるため改作・創作した部分もあります。

◉編集委員　本田宗夫　今泉せつ子

片山みさ枝　西村麗子

金岡美鶴　松本和子

山本敏子　丹生恭子

服部悦子

題字　石古勲

カット　片山弘道

かたりきかせ やしろ町のむかし話

昭和61年4月29日発行

編集　社町保育園児童館民話編集委員会

発行　社町保育園児童館童話研究会

印刷　藤井印刷
社町上中30　TEL 42－0445